

## 就任あいさつ

放射線診断学講座教授 市川 新太郎



令和7年7月1日付で放射線診断学講座教授を拝命いたしました市川新太郎と申します。

浜松医科大学から4年ぶりに母校へ戻り、地域医療と学術の発展に貢献できることを大変光栄に思っております。

私どもの講座は画像診断とIVRの二つの柱から成り、いずれも現代医療において欠かすことのできない領域です。画像診断なしに成り立つ診療科はほとんどなく、皆様の臨床に確実に役立つ診断レポートや安全で確実なIVR治療を提供できるよう、医局員一同日々研鑽を重ねております。

また現在、最先端のIVR-CT装置の導入を進め

ており、低侵襲治療への対応力をさらに高め、より幅広い診療ニーズにお応えできる体制を整えてまいります。

近年、画像技術の進歩は目覚ましく、AIを活用した画像解析や定量的診断など、新たな医療の形が生まれつつあります。私たちはこうした技術を積極的に取り入れ、より正確で安全な医療の実現を目指しています。一方で、医療の本質は「人を診ること」にあります。画像診断の専門性を高めるとともに、臨床現場や地域医療との連携を重視し、患者さん一人ひとりに最適な診断と治療を届けていきたいと考えています。

今後も質の高い画像診断とIVR治療を提供できるよう、各診療科の医師、診療放射線技師、看護師、コメディカルスタッフなど多職種の皆様と連携し、よりよい体制の構築に努めてまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

## 就任あいさつ

脳神経システム科学講座教授 梅田 達也



令和7年9月1日付で脳神経システム科学講座教授を拝命いたしました梅田達也と申します。

本講座は本学に新設された講座であり、脳と身体の相互作用をシステムとして捉え、臨床へと展開しうる基礎研究の推進を目指しております。

私は東京医科歯科大学にて医学博士号を取得後、国立精神・神経医療研究センターおよび京都大学大学院医学系研究科において、体性感覚・運動制御・脳卒中後の回復機構に関する研究と基礎医学教育に携わってまいりました。霊長類を対象とした電気生理学的記録と計算論的解析を

組み合わせることで、運動に伴って感覚情報がどのように調節されるのかを明らかにしてきました。

今後は、本学に新たに整備する小型霊長類マーモセットを用いた神経科学研究を軸に、ヒトに近い脳・行動レベルでの脳機能の理解と、電気刺激などによる革新的治療法の開発を進めてまいりたいと考えております。マーモセットは遺伝学的操作や生理信号計測、疾患モデルとの相性が良く、神経回路の可塑性や機能回復メカニズムの解明に適したモデル動物です。基礎研究にとどまらず、脳卒中や神経変性疾患など、先生方が日々向き合っておられる疾患の理解と治療オプションの拡充に貢献できるよう、臨床各講座の先生方との共同研究も積極的に進めてまいりたく存じます。

今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

## 就任あいさつ

脳神経外科学講座教授 吉岡 秀幸



このたび、令和7年11月1日付で脳神経外科学講座教授を拝命いたしました吉岡秀幸と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は、山梨医科大学を第13期生として卒業後、脳神経外科学教室に入局し、脳卒中診療を中心に、前任の木内博之病院長のご指導のもと、外科治療および血管内治療、急性期・周術期管理などの脳神経外科診療と研究に携わってまいりました。

本院は、脳卒中診療において県内唯一の一次脳卒中センターコア施設として高度な急性期医療を担うとともに、脳卒中・心臓病等総合支援センターとして、患者の包括

的支援や市民啓発、行政や医療機関との連携などにも取り組んでおります。

また、脳卒中をはじめ、脳腫瘍、外傷、脊椎脊髄疾患、機能的疾患、てんかんなど、幅広い脳神経外科診療を行っております。今後は、脳神経外科としての総合力をさらに高め、院内診療科や多職種との連携を一層強化していきたいと考えております。

さらに、大学病院の重要な使命である人材育成にも注力し、学生教育や研修医・若手医師の指導を通じて、将来の医療を担う人材の育成に尽力してまいります。

今後とも、本学および附属病院の発展に貢献できるよう誠心誠意努めてまいりますので、何卒ご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## メモリアルデー（安全の日研修会）を開催しました

医療の質・安全管理部 荒神 裕之

当院では、平成26年12月13日にPCA（自己調節鎮痛法）の薬剤過量投与により発生した医療事故を全職員が深く胸に刻み、決して風化させることなく、二度とこのような過ちを繰り返さないという固い決意を新たにするため、毎年研修会を実施しており、本年も12月10日に開催しました。

木内病院長からは、故人とご遺族に向けた哀悼の意に加え、毎年、欠かさず本研修会を続ける中で、新たな気づきが生まれ、さらなる医療安全の深化の契機となることが述べられました。

その後、ご遺族からのお手紙を朗読し、ご遺族の想いを全職員で共有すると共に、本件事故に関与した医療者の手記の紹介を通じて、再発防止に向けた弛まぬ取り組みの重要性を職員一人一人が心に刻みました。

最後に、最近のインシデントの共有を通じて、安全重点目標である心配ごとを声に出すこと、多職種でルールや業務の改善に取り組むことの重要性を再確認して研修会を終了しました。



\*当日の研修会場の様子

## 「令和7年度医学教育等関係業務功労者」の表彰

令和7年12月2日、文部科学省において令和7年度医学教育等関係業務功労者表彰式が行われ、遠藤真澄副臨床検査技師長と大島信二主任診療放射線技師が表彰されました。

<受賞者コメント>

検査部 副臨床検査技師長 **遠藤 真澄**

この度は「令和7年度医学教育等関係業務功労者」の表彰を賜り誠にありがとうございました。昭和49年度より行われている歴史ある国公立大学の医療従事者の栄えある表彰で大変光栄であるとともに、これもひとえに日頃よりご指導くださった先生方や諸先輩方をはじめ同僚、家族の支援の賜物と深く感謝申し上げます。

今、医療現場は、人材不足など様々

な問題に直面していますが、松本大臣からも大学病院が担う教育・研究等の強化という観点から、支援に努めていくというお言葉がありました。

今回の受賞を励みに、今後も検査の向上、人材育成に微力ながら尽力して参りたいと思います。引き続きご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。



放射線技術部 主任診療放射線技師 **大島 信二**

この度は「令和7年度医学教育等関係業務功労者」の栄誉を賜り、誠にありがとうございました。時代の変遷と医療技術の急速な進歩の中で、常に最新の知識と技術を習得すべく自己研鑽に努め、緊張感を持って業務に邁進してまいりました。その道のりは決して平坦なものではなく、むしろ多くの苦労や失敗を重ねてきたように思います。今日まで

歩んでこられたのも、折に触れてご指導・ご鞭撻を賜りました諸先輩方、ならびに日々現場を支えてくださったスタッフの皆様のお力添えがあってこそであり、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

今後も、これまでに培ってきた知識と技術を次世代へと継承すべく、一層精進してまいり所存です。



## 「令和7年度日本薬学会関東支部奨励賞」を受賞

薬剤部 薬剤主任 **内田 淳**

令和7年9月13日、内田淳 薬剤主任/室長が令和7年度日本薬学会関東支部奨励賞を受賞しました。本賞は、薬学分野での卓越した研究業績、ならびに薬剤師としての優れた功績をあげた者に贈られるものです。

<受賞者コメント>

この度はこのような賞をいただくことができ、誠に嬉しく思います。受賞題目である「臨床的課題解決を指向した医療現場発の新規製剤開発」は、臨床現場で課題となっていることやニーズに対し、医療者としての視点と製剤学的なアプローチを組み合わせることで解決策を見出し、安心・安全で質の高い医療の提供に繋がる成果と、創薬・育薬の推進が期待できる新たな知見を得ることができました。

本賞を受賞に際し、ご指導・ご支援いただきまし

た薬剤部の皆様に感謝いたします。今後とも、日々の業務に邁進するとともに、臨床現場における課題やニーズを研究へと発展させ、より一層研鑽を重ねてまいりたいと思います。



# 令和7年度研修医マッチング結果について

臨床研修センター長 矢ヶ崎 英晃

令和7年度の本院の研修医マッチングは、昨年度より1名少ない25名の医学生が本院の研修にマッチし、マッチ率は59.5%でした。昨年度と大きく変わらない結果ですが、全国的には大学病院の研修医は減少の一途を辿っており、大学病院の研修医確保が深刻な課題となっています。実際、全国大学病院のマッチ率平均は35.2%まで低下しており、山梨県全体でもマッチ数は減少傾向で、都市部の市中病院の研修医が増えています。この原因として、給与等の待遇や研修医が実施できる手技などの裁量が高い研修病院に人気集中していることが分析されています。

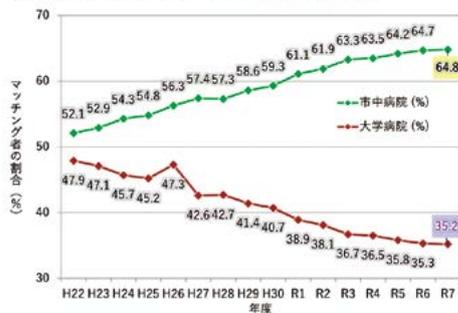
本院の卒後臨床研修は全国的にも一定の評価をいただいております。病床数あたりのマッチ者数では全国の国立大学中15位という結果でした。これは、日頃より指導医の先生が熱意をもって医学生および研修医教育に取り組んでいただいている成果と考えています。一方、本院で研修する初期研修医のうち、自大学出身者の割合は84%と高く、母校出身者に

依存する傾向が強い点は課題です。全国の医学部卒業生が出身大学で研修する平均数は14名であるのに対し、本学では毎年20名以上が母校での研修を選択しており、教育の質が高く評価されている一方で、山梨県外からの研修医獲得が十分とはいえない状況といえます。

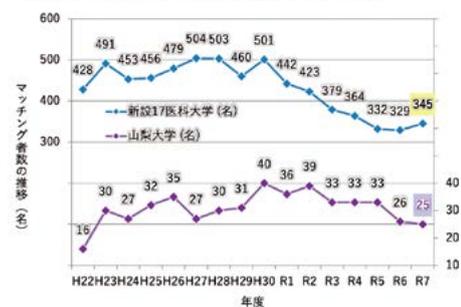
今後も本院が地域の基幹病院として選ばれ続けるために、研修医が主体性をもって診療に参加でき、適切な待遇のもとで成長できる環境を整備したいと考えます。一方で全国的に初期臨床研修における大学病院離れが続く中、後期専攻医研修において優秀な人材を確保し、将来の診療・教育・研究を担う医師を育成する体制も重要だと考えます。そのため、各診療科の専門性を活かした魅力ある研修プログラムの発信と、地域医療機関との連携強化を一層推進して参ります。

引き続き、職員の皆さまには医学生・研修医教育への温かいご支援とご理解を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

マッチング者の割合の推移【全国 大学・市中病院】



マッチング者数の推移【新設17医科大学・山梨大学】



## 本学学生が全国 BLS 大会で混合チーム戦において3位に入賞

地域医療学・総合診療学 針井 則一

令和7年9月14日、東京医科大学新宿キャンパスにて開催された、全国 BLS 選手権大会において、「山梨大学医学部 救急医療サークル富士救」に所属する本学学生が混合チーム戦において3位に入賞しました。

混合チーム戦は、初対面の学生たちが協力し合い救急蘇生に取り組み、心肺蘇生法(胸骨圧迫や人工呼吸)や AED の使用など、BLS (※) の手順と技術の正確性、迅速性、効果性を競うもので、国際的なガイドラインに基づいた「質の高い BLS」を実践した点が評価されました。

なお、本学は、本大会の大学対抗戦でも参加50

大学中10位となり、大健闘しました。

※ BLS とは、Basic Life Support (一次救命処置) の略で、心肺停止状態の人を救うために、一般の人でも救急隊到着までに行う救急手当のことで、心臓マッサージ、人工呼吸、AED の使用が主な内容です。専門的な器具や知識が少なくても実施でき、救命率を高めるために重要です。



## 医学部附属病院において防災トリアージ訓練を実施

山梨大学医学部防災対策委員会委員長 森口 武史

令和7年11月29日(土)、医学部附属病院において「防災トリアージ(※1) 訓練」を行いました。

今回の訓練には、学内の教職員(当院 DMAT(※2) を含む。)や学生が参加し、災害時の対応力向上を目的に実施しました。



トリアージ (START) ゾーン状況

当院は「地域災害拠点病院」として、災害時に地域医療継続の中核を担う責務があります。これまで、関東・東海地区の巨大地震や富士山噴火などを想定した訓練を継続してきましたが、近年は新興感染症やNBC 災害(核・生物・化学災害)(※3) への懸念も高まっています。

そこで令和7年度は、新興感染症の流行下、地震に引き続き、化学物質事故が発生する「複合災害」を想定し、対応能力の強化を目指しました。

訓練では、地震により化学物質を積載した車両が横転し、毒性の液体やガスが流出。事故当事者や周辺住民が体調不良を訴え、時間の経過とともに当院救急外来への受診者が増加するというシナリオを設定しました。



NBC 除染テント内

この状況下で、感染症を含むNBC 災害への対応が求められるため、除染テントを設置し、感染対策とトリアージを同時に行う体制を検証しま

した。特に、感染制御部の井上部長にも協力を得て、感染対策と災害医療の両立を確認しました。



「緑」診察エリア (シミュレーションセンター)

また今回は、段階的に患者数が増える現実的なシナリオとし、電子カルテなど通常診療システムを稼働させたまま、徐々に対応を強化する手順を定めたマニュアル案が運用可能かどうかを検証しました。

今回の訓練は、過去の取り組みで培った「動員力」「協働基盤」を土台に、医療・安全・指揮統制が同時に求められる化学物質事案を想定した、より実践的な内容でした。

訓練後には各担当ゾーンで振り返りを行い、臨床講義棟で全体検証会を開催。木内病院長や各ゾーンリーダーから、災害対策マニュアル改訂に向けた貴重な意見をいただきました。

今後も、地域医療の安全を守るため、より高度な災害対応力の向上に努めてまいります。

※1【トリアージ】大規模災害等により多数の負傷者を受け入れる際、限られた医療資源でできるだけ多くの人を助けるため、重症度により負傷者の搬送や治療の優先順位をつけること。

※2【DMAT隊】災害派遣医療チーム (Disaster Medical Assistance Team)の頭文字をとって略して「DMAT」と呼ばれ、医師、看護師、業務調整員(医師・看護師以外の医療職及び事務職員)により構成される。大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期(おおむね48時間以内)から活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チームのこと。

※3【NBC災害】核(Nuclear)、生物(Biological)、化学(Chemical)の頭文字をとった言葉で、放射性物質、病原体、化学物質による災害を指します。

## 令和7年度医療法第25条に基づく立入検査について

総務課 研究協力・医療企画グループ 村松 郁子

まだ暑さの残る令和7年9月18日、関東信越厚生局および山梨県による医療法第25条の規定に基づく立入検査が実施されました。当日は21名の



の医療監視員・検査員が来院し、書類検査やヒアリング、現場視察を通じて、医療の安全管理体制、院内感染対策および医薬品・医療機器管理体制など、幅広い項目について法令に沿った適正な管理が行われているか確認されました。病院長をはじめ、関係各部・診療科の方々に丁寧にご対応いただき、当院の適切な管理体制や業務への高い意識を理解していただけたものと思います。

講評では、法令に反する不適切な事項は認められないとの評価をいただきました。一方で、事故等報告書の提出期限厳守、対象医師への面接

の適正実施、インターバルの確保については、昨年引き続き継続対応を求められました。その他指導・助言をいただいた事項についても改善を進め、より良質で適切な医療を提供できる病院づくりを目指して職員一丸となって取り組んでいただきたいと思います。



最後に、事前調書の作成・準備にご協力いただいた皆さま、当日の対応や記録を担当して下さった皆さまに、心より感謝申し上げます。



## 「世界脳卒中デー」武田信玄公像と山梨県庁をライトアップ

神経内科学講座 教授 上野 祐司

平成18年10月、世界脳卒中機構(WSO)が結成されました。これを記念し、毎年10月29日を「世界脳卒中デー」とすることが宣言されました。

WSOでは、世界脳卒中デーに際し、脳卒中予防の重要性を全世界に呼びかけております。日本では、世界脳卒中デーキャンペーンの一環として、各地でモニュメントや建造物を、WSOのシンボルカラーであるインディゴ・ブルーにライトアップしております。山梨県でも、武田信玄公像と山梨県庁を10月27日(月)～30日(木)にライトアップしました。また、私達は、「5つのサイン、10の心がけ」をテーマとして、脳卒中啓発活動を行いました。

下記、5つのサインに気づいたら、いち早く受診すること、10の心がけは高血圧・糖尿病・不整脈・たばこ・アルコール・コレステロール・塩分・脂肪・運動・肥満・病院受診に留意することを啓発しました。現在山梨大学では、脳卒中・循環器病等総合支援センターが開設され、脳卒中患者

さんへの支援を行っております。

- ①体の片側がうまく動かさせない、しびれる
- ②ろれつが回らない、言葉が出ない
- ③立てない、歩けない
- ④視野の異常
- ⑤激しい頭痛



## クリスマスコンサートを開催しました

総務課 総務グループ

令和7年12月10日(水)に病院正面玄関でクリスマスコンサートを開催しました。

このコンサートは、入院患者さんに癒しのひと時をお届けするため毎年開催しているものです。

コンサートでは、木内博之病院長による開会挨拶の後、3名の演奏グループ「フェールアンサンブル」がヴァイオリン、フルート、ピアノを利用し、「クリスマスメドレー」や「情熱大陸」、「上を向いて歩こう」などを演奏しました。

続いて、本学医学部交響楽団の皆様が、「4つのヴァイオリンのための協奏曲(ヴィヴァルディ)」や「アイネクライネナハトムジーク(モーツァルト)」、「カノン(パッヘルベル)」を演奏し、入院されている患者さんに向けて、一足早いクリスマスをお届けしました。

さらに、ヴァンフォーレ甲府公式マスコットキャラクターであるヴァン君も参加し、患者さんとともに音楽を楽しみ、記念撮影、サイン会等で会

場を盛り上げました。

また、スターバックスコーヒーからのコーヒーサーブのプレゼントを片手に、迫力ある華麗な生演奏に心も温まり、大盛況のクリスマスコンサートとなりました。

参加した患者さんからは、「少し早いけどクリスマスの雰囲気味わうことができた」「音楽とコーヒーに癒された」「ヴァン君に会えるとは思わなかった」「写真とサインをもらえてよかった」と声をいただきました。

また、コンサートの前には小児病棟にもヴァン君が登場し、子どもたちとの触れ合いの時間を過ごしました。ヴァン君と触れ合った子供たちからは、「ヴァン君が来てびっくりした」「ふわふわだった」「大きかった」「フォーレちゃんにも会いたかった」などの声があがりました。



## 医学部キャンパスで打ち上げ花火「第2回 梨医群青花火大会」を開催

学生有志団体「チーム花火」

令和7年10月25日(土)、本学医学部キャンパスにて「第2回梨医群青花火大会」を開催いたしました。

この取り組みは「小児病棟の子どもたちに花火を!」をテーマに掲げ、昨年に引き続き株式会社マルゴー様にご協力をいただき実現したものです。花火を通じて子どもたちに「私たちチーム花火もみんなのことを応援しているよ!」という想いを届けるべく、当日まで心を込めて準備に取り組んでまいりました。

今年は多くの報道機関にも取材していただき、学内外より大変多くの方から活動へのご理解とご支援を賜りました。特に病院職員の皆様には、病棟管理や子どもたちの誘導など、多方面にわたり運営をお支えいただきましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

当日は天候の悪化が心配されましたが、チーム花火、患者様のご家族、そして本活動に関わってくださった全ての皆様の祈りが通じたのか、無事に夜空へ花火を打ち上げることができました。輝く花火の光の下には、子どもたちの弾ける笑顔と



いう、もう一つの美しい大輪の花が咲いていました。

この笑顔を来年度以降もお届けできるよう、我々チーム花火一同、精一杯努めてまいり所存です。引き続き本活動にご理解、ご協力を賜れますと幸いです。

重ねてになりますが、「第2回梨医群青花火大会」にご協力いただいた全ての方に心より感謝申し上げます。

### 第2回 梨医群青花火大会

